

## 巻 頭 言

平成30年度から漸次実施されていく新しい学習指導要領に合わせて、教員免許法の改正と教職課程の全国的な水準を確保する「コアカリキュラム」の策定が進められている。今、大学における教員養成は大きな変革の時を迎えている。求められているのは、個々の大学の自主性や独自性を失うことなく、教育現場や地域社会のニーズに応える教育内容を示すこと、そして、社会が学校教育に期待するものとは何か、その目標を社会と共有することである。

2013年の春、先進的な幼児教育の実践で知られる北イタリアのレッジョ・エミリア市を訪れた時、最も印象に残ったのは、その教育の基本姿勢が「地域との連携、地域への貢献」であったことである。教育長が誇らしげに語ったのは、子どもたちが町全体をディスプレイするプロジェクトだった。幼児学校に通う子どもたちが町のあちこちを見学する。訪問先は図書館や公園のような公共の場だけでなく、美容院や靴屋のような個人商店にまで及ぶ。園に帰ってきた子どもたちは、自分なりに「解釈したこと」を様々な形で表現する。例えば、大人では考えつかないようなユニークな形の靴や店の看板などである。そして、今度は大人たちが子どもたちの作品を「アート」や「デザイン」として受け取る側に回る。年に一度のイベントでは、子どもたちが作ったセラミックの靴が店に並べられ、子どもたちがデザインした垂れ幕や看板が店の入り口に掲げられる。市民たちはそれを斬新なディスプレイ、ユニークな広告として楽しみ、町全体が祝祭の雰囲気包まれる。

このプロジェクトにおいて、子どもたちは地域社会のサービスを受け取るだけの存在ではない。彼ら自身も地域に貢献し、社会参加しているのである。レッジョ・エミリア市では、このような子どもと大人の相互的な地域貢献活動を通して、幼児期から市民としての自覚や連帯感を育てていく。それが、第2次世界大戦中のレジスタンスや戦後の瓦礫からの復興を支えてきたこの町の伝統であり、アイデンティティであるからだ。レッジョ・エミリアの幼児教育が、日本で想像していたような「アート（造形表現）を中心とした創造的な表現活動による保育実践」ではなく、町ぐるみで共同体の一員を育てる骨太なプロジェクトであると気づいて、社会と歴史と教育がいかに深く関わるか、改めて認識させられた。

ひるがえって、日本の状況を考えてみる。来年は明治維新から数えてちょうど150年の節目に当たる。近代的な社会への転換と引き換えに、江戸期までの文化的伝承をリセットした我々の社会は、21世紀に入って新たな局面を迎えている。19世紀以来の西欧の知の体系を基盤としてきた日本の大学教育も、時代に即応した新しい知の再構築を求められている。だが、未来への答えは、外側から与えられるものではなく、我々の社会がこれまで何を指し、何を育ててきたか、そのプロセスの中から我々自身が見出さねばならないものであろう。

本紀要の5篇の論考が、ささやかでも未来の教育を考えるきっかけになれば幸いである。

(初等教育学科長 永岡 都)